
deep • red

tears

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

deep・red

【Nコード】

N4543P

【作者名】

tears

【あらすじ】

ソウが好き…

何よりも好き…

俺はアイツ以外は何も要らない

愛の意味を理解していない俺は失ってからほんとうの愛を知った。

けど…

i n n c o e n t ・ b l u e の主人公…ソウの双子の兄・シュウの物語

【1】

「シュウ……」

「ソウ……」

あああの頃だ…俺の初恋のヒト…ソウと俺が遊んでた頃…俺はソウを捨てた…

愛するものを信じること…幸せを願うこと………同じ
報われない想いを抱いた俺たちの関係は俺の弱さによって呆気なく
崩れていった

けど、俺は理解していない……無いにも……自分がどれだけ……恵まれていたか……どれだけ……被害者ぶってはソウを傷つけていた

俺たちの距離は余りにも近くでもそんなのは全て逃げるための言い訳で

とても、運命は残酷に俺たちを引き剥がした……この色彩の鮮やかな世界で俺たちの色は儚く輝いていた

【1】

「…シュウ？」

「……………」

「シュウ！」

「はい！！」

「どうしたの………凄い顔して…」

一応、自己紹介を………俺は七海^{ナナミ} 朱赤い髪と平均的な身長……で怒鳴ったのは椎名^{シイナ} 雅樹^{マサキ}…心配してくれた女性は左条院^{サジヨウイン} 結菜^{ユイナ}

「……………なんでもないですよ…」

「いや、蒼君のことを考えていたろ…」

「……………」

「けど…もう5年でしょ…いい加減に新しい人を見つけないと…」

「…………俺は大切な人はいない…」

「……………シュウってさ、もしかして蒼君のことを憎んでる？」

流石に話が繋がらないので戸惑ってしまった。

「……………いえ…」

「違うんだ…蒼君に悪いことをしたけど、関わりたくないって感じだったから…」

「俺はアイツに会う権利さえありませんよ…」

「……………シュウ？それは逃げてるだけだよ…それに償えないから
って償うことを許された訳では無いんだよ…」

「ツー俺の何がわかる？何も知らないくせに偉そうに言うな…」

俺は思い切り怒鳴ってしまった。

「……………そうね…ごめんなさい」

「……………シュウ…いくらなんでもそれは言い過ぎだ」

「……………すいません…」

「今日はもういい…明日は入学式だ…休んでいいぞ…」

俺は雅樹の親切に甘えることにした

【2】

「おはよー」

「シュウ…ご飯はできてるから」

雅樹は焼き魚を乗せた皿をテーブルに置いて味噌汁を注いだ、俺は冷蔵庫から漬物を取って二人で食べた。

「後片付けはやっておくから制服に着替えてこい」

俺は洗面所に向かい制服に着替えた。

「似合わない…」

鏡に写った俺は派手な赤い髪と黒いブレザーに白いYシャツ、青いネクタイ…アンバランスな組み合わせに溜め息が出る。

「準備出来たか？ シュウ…」

「出来たけど…」

「まあ予想通りだな」

「……………どういう意味？」

「いった通り、それとリョクが来ている」

「ヤッベー行ってきます」

「朱……遅い…」

錦戸 ニシキド 緑雅樹 リョクのバーで俺と同じようにバイトしているヤツで……
まあ親友ってヤツだ

「悪い…緑…行くぞ」

入学式……またいつもと変わらない日常が待っていると思っていた
…“アイツ”会うまでは

「あー疲れた」

入学式の校長の挨拶って拷問だね、うん、マジで…

「おい」

「誰？」

「誰？じゃねえよ…クラス発表聞いてないだろ…」

まあ大変…

「俺と同じクラスだからついてこい」

チャライ人はそういたので着いていくことにした。

「俺は前波 マエナミ 幸人 ユキト お前は？」

「さあ何でしょう…」

「はあ…まあ自己紹介の時に聞けばいいか」

そういえばそうか

「まあ案内してくれたし一応、自己紹介しとく……俺は七海 朱…
だ」

「朱？」

幸人は俺の顔を見つめた。

「なんだよ…惚れた？」

「いや…やっぱり気のせいだな」

「何が？」

「俺の好きな人に似ていたんだよ…一応」

似ている？まさか……“アイツ”か？

「そいつの名前は？」

「確か結崎だったはず…」

人違いだな完璧に…

「ふん」

「まあ、お前と違ってクールで綺麗な人だったけどな」

「……………今、遠回しに嫌味か？」

今の幸人の言葉にカチンときたが仕方ないので許してやることにした。

「オースこの1ーSの担任の新山^{ニヤマ} 慎吾^{シンゴ}だ、まあよろしくな」

金髪ホスト教師……………ムカつくけどイケメンだな…

「とりあえず、自己紹介な…」

「俺は前波 幸人です、趣味はバンドです」

バンドかあゝ

「僕は小日向^{コヒナタ} 歩^{アユム}、趣味は料理です…」

身長……160cm……くらいか？

「今日はこれで終わりのチャイムが鳴ったら帰っていいぞ…」

新山先生は言うと同時に机に伏せた。

「職務怠慢……」

「……………七海…てめえの為に初日から楽しい課題を持ってこようか？」

しまった…余計なこと言ってしまった。

「……………結構です」

クッソ…前でクスクスって幸人が笑っているし…

キーンコーンカーンコーン

「とっと帰れお前ら…」

言われなくても帰るし…まあこんな感じに何時までも平和な時が…

現実逃避が…続くってそう思っていた…いたんだ…“アイツ”
つ
て言う現実が目の前に現れるまでは…

【3】

「うーん…雅樹、おはよ…朝食の準備、手伝うよ」

雅樹は一瞬、手を止めて何故か戸惑った声を出した。

「朱……お前が手伝わないのが1番の手伝いだよ…」

「……………酷くない？」

「お前はカクテルや皿洗いは出来ても料理の腕は凡人では理解出来ない…」

「……………確かに下手なのは認めるけど……………そこまで言うこと
なくない？」

「さ、さあ出来たぞ…食べるか」

逃げられたけど…お腹が空いているからいいか……

「学校はどうだった？」

「どう？ って……設備は凄いし、校舎も綺麗だし……流石、進学校だよ……」

「そうじゃなくて……友達はできたのか……」

「いや……作るつもりはないし……」

……もう……失うくらいなら……

「……………蒼君が聞いたら悲しむな……」

「なんで……ソウが出てくるんだよ」

「自己犠牲が必ず本人の為になるとは限らない……………朱……………少し広く柔軟に考えないと蒼君を傷付けるよ」

たまに……………雅樹の言うことが解らなくなる…

「だけど……………」

「時間が経つと冷静になれることがあるのさ……………だから、まだ諦めるな」

「……………うん」

俺は逆の可能性を考えて無かった……………あまりにも滑稽なくらい…

「七海くん…おはようございます…」

「え」と…」

「小日向 歩です…」

小日向はシュンと俯いた。

「悪い…小日向…」

なんか子犬みたいで可愛い…

「……………良いですよ…今日は役員を決めるみたいで……………」

「めんどー」

「言うと思いました。」

小日向は天使のような笑みで俺を見た。

「あー抱きてー」

「あの細腰にいたいな…」

「泣き顔……想像したらヤバイッ」

あーホントにめんど臭いな…

「キヤーなに？赤い髪の子、格好よくない…」

「抱いてー」

「むー小日向くんだけ…狡い」

………黙れ、チワワ

「あはは…」

小日向の顔が引きつっているし…

「七海くん…起きてください」

「煩いな…」

なんだよ

「黒板、見て」

「えっと…何々、学級役員…七海 朱？……………待ちやがれ」

「なんだ…寝坊助の七海くん？」

嫌味かよ…ホスト教師

「なんだ…じゃあねえよ…勝手に何決めてんだよ」

「居眠りしたお前が悪い」

俺が言い返そうとするとチャイムが鳴りやがった。

「じゃあ、頑張って七海くん？」

ホスト教師はこれ以上ないくらいニヤツて笑って帰っていった。

「……………っていうことがあったんだよ」

雅樹のバーで緑に今日、学校であったことを愚痴っていた。

「まあ仕方ないじゃあないか……………それより……………」

「ああ…」

緑とバンドを組んではいるが俺はギター　緑はベースとメンバー不

足に悩まされている。

「まず……ヴォカールは確実に欲しいよね」

「ソウくらい……とは言わないけど……せめて、俺以上はほしいな……」

俺は自分の都合の良さに吐き気がした。

「ソウ？ 確か、マスターが言っていた朱の初恋の人？」

雅樹のお喋り……余計なことを……

「……………ああ」

緑は何故か機嫌を悪くした。

「……………おい、そろそろ、行けるか？ 朱、緑」

「ああ、行けるよ…行こうか緑」

俺たちはいつも通りにステージに上がった、いつも通りの物足りない演奏…何処と無く虚しさが心を支配した。

「…………お疲れ」

「…お疲れ様です、左条院さん」

緑は左条院さんに挨拶をした…俺は遠くで二人のやり取りを見ていた。

「相変わらず楽しそうね…緑は…でも片割れは不満そうね」
「なんのことですか？」

「バンドの人数不足…解決するといいね」

結菜さんには隠し事は出来ないな…

「左条院さんはいい人知ってませんか？」

「知ってるけど……………まあ“そうだったら”私は嬉しいけどね」

結菜さんは俺を見て、なにか企んでいる笑みを浮かべた……………俺と緑は思わず身震いをした。

「まあ…“応援”しているから頑張りなさい」

結菜さんの真意に俺が気付くのはそんなに遠くは無かった。

【1】

「七海くんは聞きましたか？」

「何を？」

5月に入り高校生活に慣れ始めた俺は何故か小日向と幸人と行動を共にすることが多い：

「：昨日、来るはずの転校生：何でも昨日、強姦にあって今日からとか：気になりませんか？」

「：いや：あんまり」

「かなり綺麗な人らしいですよ：なんでもあの新山先生も一目惚れ

とか…」

「その話を詳しく聞かせろ…あの野郎に一泡喰わせてやる…」

「ぼく…遠くで見ましたが…綺麗な蒼い髪の人でしたよ…確か身長は七海くんに近い感じの人で体型は痩せていました。」

俺は手を顎に当てた

「ふうん…まあ興味無いけど…」

「オース…お前ら、今日は転校生を紹介するぞ…入れ、結崎…」

教室のドアの乾いた音共に愛しくてかけがえのない…そして“俺が捨てた人”

「……………ソウ…」

「…七海くん？」

「結崎 蒼です…11Sに一年間お世話になりますよろしくお願い

します」

アイツは…三年前の俺と同じ黒い髪も今は綺麗な蒼に染められていた…赤と青…まるでお互いの色を…個性を象徴するように染められた髪…高校生にしては細い体型…

「……………ソウ…」

俺は消えそうで掠れた声で呟いた…クラスのソウに対する反響は凄まじく…けど、今の俺にはそれすら聞こえないほど……………ソウの儚さに…脆さに…釘付けだった。

「結崎の席はあそこな…」

ありかよ

「よろしく…」

ソウはそれだけを言う俺の隣の席に座った…

俺は返事を返すことなくソウを覗き見ていた。

三年前よりかなり細くなった体型はソウのより一層儚くしていた。

「はあ…」

あのあとの授業はどうだか覚えてない………フラフラとした足どりで家に着いた俺は制服を着替えずにテーブルに突っ伏せて何度目になるかわからない溜め息をついた。

「……どうした…溜め息なんかついて…」

雅樹はコーヒーを注ぎ…俺にミルクと砂糖を渡すと俺向かいに腰かけた。

「何があつたのかは知らんがどうした？」

「ソウが転校してきた…」

「ソウ？…って確か…でも昨日、緑から聞いた話だと…結崎って名前だそうだが…」

「間違いなく“アイツ”だよ…」

「蒼君と喧嘩でもしたか？」

「…“よろしく”だよ」

雅樹は少し考え込んだ…

「なんか…さ…昔のソウよりかなり細くなっていたし…見てて辛い」

「……………考えすぎ…じゃないか？思春期にはよくあることだし…
…なにも朱や蒼君に限った話では無いと思うけど…」

「だけど…」

「一応…“よろしく”って言ってくれたんだろ？お前たち双子には
三年間の“対話”をしなければならんだよ…」

「わかった…」

雅樹は俺の頭を撫でて台所に立って調理を始めた：俺は自室に向かい部屋着に着替えた。

「ウマイ…この肉じゃがサイコ」

「ハイハイ…おかわりあるから慌てるな…」

「よー朱にマスター」

「緑!？」

何故か緑が家に来ていた。

緑はバーの近くで兄貴と暮らしていて兄貴は今は大学の医学部に所属しており…：現在は臨床実習とかでほとんど家にはいない…

「俺もご飯食べていいか？」

「ああ少し待ってろ…」

雅樹は立ち上がって緑の分を入れた

「マスターの料理は最高」

「あー朱と同じことを言っているよ…」

「だって……むぐ…」

「はぁ…ほら…いつも余分に作ってあるから焦るな」

雅樹は呆れながら緑に水を渡した。

「緑は相変わら…むぐ…」

「……はあ…朱も…何やってんだよ」

雅樹は俺に水を渡しながら溜め息をついた。

「ダサ…」

「緑だって…ご飯詰まらせただろ」

「はいはい…そこまでにしとけ…ご飯が冷めるぞ…」

………俺は気づかなかった…ソウの些細な変化に…悲鳴に…

楽だった…緑と雅樹がいれば…逃げていれば、罪の意思に苛まれる
ことがなく生きていけたから…

けど…俺は徐々に見失い始めたんだ……ソウを……愛する意味を…
大切なヒトの“大切さを”

【2】

「……………て言うわけ」

「七海くん…頭いいんですね」

間近に迫っている中間テストに備えて5限目から自習……………なんだが…

「あの…」

「なんだ？」

「結崎くん……………起こしたほうがいいですか？」

「この…馬鹿は…」

「結崎くん？結崎くん…起きてください」

「何だよ…」

この馬鹿は…起こしてもらって偉そうに…

「授業中ですよ」

「ハイハイ」

この野郎……

「結崎くん？今はテストの為の自習なんだからちゃんとしないと……」

「……………」

この野郎……聞く耳ないな……

「起きろ、ソウ」

「なんだよ」

「ちゃんと勉強しないと補習ですよ、結崎くん……」

「安心しろよ、少なくともチビよりは俺は頭はいいから……」

さすがに酷いので俺は頭を叩いた。

「イデ・・・」

「いくらなんでも言い過ぎだ・・・歩はソウのために・・・」

「・・・事実だし・・・それとチビ、ここの二次方程式、間違っているぞ」

あ、ほんとだ・・・

「チビじゃない・・・うそ」

この前習ったやつだ・・・結構、難しかったけど・・・

「公式の方から間違っているぞ・・・それに名前を知らないから仕方ないだろ」

「じゃあ・・・自己紹介しますね・・・」

「興味ないからいいですよ・・・」

反抗期か？

「・・・・・・・・・・」

「ソウはツンデレ受けだから気にしないでね」

「なんでいるんだよ」

誰だ？

「おれは結城^{ユウキ} 和哉^{カズヤ}ちなみにこの綺麗な顔を歪ませて俺を睨んでる
のは結崎 蒼………君たちは」

「小日……」

「しなくていいから、チビ」

「ソウ？流石に怒るよ？」

「和哉のことだチビとシュウの名前くらいは調べてあるだろ？」

は？

「さすが…蒼、バレたか」

「腐っている…」

酷くない？

「結崎くん…酷いですよ」

「別にいつものことだよ……ところで小日向くん…帝王と最近どう？」

いつもあんな感じかよ…

「帝王？」

ああ…ソウは転校してきたばかりだから知らないか…

「蒼、帝王って知っているか？」

「知っているけど…それがなに？」

「小日向くんは帝王のセフレなんだよ」

セフレって…

「小日向君？久しぶりだね…」

「…久しぶり」

「季島先輩に左条院先輩…わざわざどうして」

「蒼…小日向くんは帝王のことが好きなんだよ…でも帝王はあまり乗り気じゃないんだよ」

コイツ…えらく詳しいなあ

「ふうん」

あ…なんか企んでるな？

「ソウ…余計なことをするなよ？」

「小日向君？昶がセフレのことで話があるって…」

「実は……」

「左条院先輩？セフレって何ですか？」

コイツは最近…マジで反抗期か？

「ソウ！？」

「蒼！？」

「蒼君！？」

「……………結崎くん？」

みんなの驚いているし……

「……………ソウ？」

あれ？なんで左条院先輩が驚いているんだ？

「左条院先輩？セフレって何ですか？」

如何にも作り笑顔って表情だな…オイ

「ご、誤解だ、ソウ…」

「ふん」

「まあ、落ち着け」

「じゃあ、俺は邪魔みたいだから帰るね」

「ソウ！？待って…」

ドスッ

なんか…夫婦喧嘩みたいだな……………ムカつく

「まさかの俺様美形×ツンデレ美少年！？これはもえ

ドスッ

「燃え尽きろ…」

俺たちは10分程度そのままボーとしていた。

「しかし……蒼君と知り合いましたか？昶…」

とりあえず…あの馬鹿………もとい、ソウに殴られた二人の頬を冷や
すべく保健室に向かった。

「……………ああ」

「なんか…ソウが少し楽しんでたように見えたのは気のせいかな？」

「わかる…アイツ何気にSっ気があるから…」

いつの間に目覚めたんだ？アイツ…

「はあ…とりあえず…自己紹介を…………和哉君と小日向君はご存知ですが…初対面の方もあるので…私は^{キシマ}季島^{ハルカ}遥です…あの人は^{サジヨウ}左条^{イン}院^{アキラ}昶です…あなたは？」

「あ…俺は^{ナナミ}七海^{シュウ}朱です」

「あれ？蒼君に似てますね…」

「まあ…………双子の兄だし…一応…」

は？なんで知っていんるだ？

「和哉君は仲がいいんですか？朱君と…」

「朱とは今日が初対面だよ……………俺は蒼と同じ北陽中の生徒だったし…」

そういえば…はじめから知り合いみたいだったな…しかし…北陽って…

「あの北陽中の出身だったんですか？結城くんは結崎くんも……………あれ？」

「ああ…いつの間にか名字が変わってるんだ…何故か？」

「知らないみたいだな……………何も…」

意味深なことを言う和哉に引っ掛かるが…ソウから聞きたいから追求はしない…………季島先輩や歩…左条院先輩もこれ以上は聞いては来なかったが…

「結崎くんと結城くんも名門…北陽中の出身だったんですか？」

名門私立北陽中学校…光葉学園の3割は北陽の出身で…かなりの偏

差値を誇ってる……光葉学園は全国から生徒が来るから大体が各地の進学校のトップ……ちなみに俺は北陽までとはいかないが……それでもかなりの偏差値を誇ってる誠佳中で歩が森宮中……俺の他には一人だけ（名前は知らないが）誠佳中から……森宮中からは歩ただ独り……だからまず……出身校が重なることはほぼない………

「ああ……ここの編入試験難しいし……北陽の出身でも……受かる人は僅かだから……蒼かもって……」

確かにソウは頭は良い方だから……光葉学園の編入試験を受かるほど……良いのか？

「蒼君は頭が良いんですか？」

「中間テストを見れば嫌でも解る……」

「俺は理事長のコネって噂を聞いたが……デマか？」

「あ……校内案内の際にこういう経緯かは知りませんが……理事長の養子……だということは聞きましたよ」

ユイザキ 結崎 海斗^{カイト}…光葉学園の理事長を30歳で就任したほど実力を持っている…かなりの鉄仮面（雅樹談）

「七海くんは理事長と知り合いなんですか？」

「いや…知らない」

“あのあと”知り合ったのか？どちらにせよ…

「それより…左条院先輩？歩になんのでしょうか？」

「なんか…攻め方が蒼に似ている…変な所で似ている双子だな…」

どういう意味だ…コラ…でも不思議と悪い気はしない……………
“ナントカ”は病気と言うが……………これは重症だな…

「……………様子見…」

「なんの？」

「……………苛め…ですか？」

は？

「……………なんで知ってる…」

「中学生になってからは蒼はモテましたから…一度それでトラブルになったんですよ…」

「中学は大丈夫だったか…」

と言うことは小学は苛めがあつた訳か…

ガンッ…

「七海くん？」

小日向は不安そうに俺を見ていたが…それどころでは無かった…

あ…やっちゃった…

「まあ…気にするな」

「ああ…」

いきなり壁を殴ったら驚くよな…

「朱君？血が出てますよ…貸してください」

ヤバいな…ソウのことになると自分を制御出来ない…

「……まあ…今のところは無いですよ…

ただ…襲われそうには何度かなりましたが…」

「「あ？どこのどいつだ？」」

思わず…左条院先輩と声が重なった。

「二人とも落ち着きなさい、和哉くんが怯えてるでしょ…」

俺の手当てを済ませた季島先輩は俺たちをたしなめた

「ワリィ…」

左条院先輩は結城にすまなさそうに謝った…

「すまん…どうも…ソウの事になると…」

結城はわりと明るい表情で話始めた。

「あ…いいですよ二人とも…左条院先輩と七海がこういう反応するのは予想済みですから…」

返す言葉もないな…

「まあ…蒼の気は凄かったからね…俺も今日ようやく会話出来たし…中学も凄かったし…」

俺と歩は苦笑した…：どうもソウくらい綺麗な人は少ないらしく…他のクラスの人どころか先輩たちや教職員の人も一目見ようとしたくらいだ…

「凄かったですね…あれは…左条院先輩や七海くん以上の盛り上がりでしたし…」

「あはは…あの容姿だとね…」

季島先輩も思わず苦笑い…

「これで蒼の凄い所はあれだけ騒がれても無自覚でいることだよな…」

「……………あれだけゲッソリするくらいちやほやされてか？」

「……………うん…」

マジか…まあ…アイツは小学の時は病弱で俺以外の人と関わることは少ないから鈍いだよな…

「なんて言うかコミュニケーション能力皆無だからな…蒼は」

両親も忙しくソウが風邪を引いた時……それも高熱の時くらいしか帰っては来なかったからな…

「はあ…確かに結崎くんは読めない所があるというか…」

読めないじゃない…わからないんだ…アイツは…病弱な身体だから友達も少ないし、それに…

「でも…そういう所も蒼のいいところなんだけどなあ…なんか人間味があって可愛いって言うか…」

「そうだね…普段は無表情なのに笑ったりしてら可愛いですよね…」

コイツらしい人だな…

「無邪気な感じが可愛いですよね…」

「いや、お前も似たようなもんだろ？」

「…まあ…そうだな」

「えーそう」

みんなで頷いた。

「ぼくは結崎くんより可愛くないですよ…」

歩は顔を赤くした…

「そろそろバイトだし帰るわ…」

俺はひとまずみんなに挨拶して帰った。

【3】

「朱……………どうした？」

「なにが？」

俺はグラスをみがきながら答えた。

「愛しい人のことで気になって仕方ないのよね」

結菜さん……………

「ソウのこと知ってましたね……………なぜ、黙ってたんですか？」

「聞かれなかったから…しかも気づいてないみたいだけど…私、陽平と同じ名字よ」

そうだった……………

「ソウのこと以外は無関心なんだから……………」

「陽平さんって？」

「ソウの主治医だよ……………まさか！！！」

陽平さんが……………

「そうよ……………陽平は私の夫よ」

「じゃあ、最初から全部、知ってたのかよ……………」

「ええ……………陽平から聞いたわよ……………流石に全部教えてくれなかったけど」

「は？」

「というか……………陽平も全部は知らないみたい」

おかしい……………陽平さんならソウになにかあったら連絡がいくはずなのに……………

「どういう意味ですか？てかお父さんは？」

「……………知らない……………和哉君は事情を知っているみたいだ

けど……………」

あいつか……………中学の友達みたいだけど

「俺は今日初めてそいつに会いしましたよ……………」

あーなんか、スッキリしないなあ

「ふうん……………蒼君は朱と再会するまでに何かあったのかな？」

「私もそう考えたけど、蒼は答えないし、和哉は誤魔化すし、結局は本人たちしか知らないってわけ」

「そうか……………朱……………今日はもう上がっていいぞ……………蒼君ことは焦っても仕方ない長期戦で行こう」

「……………はい……………では、失礼します、結奈さんもまた……………」

「…」

「結菜さん？」

「あ！ごめん、少し考え事をしていたから…」

「失礼しますね」

「またね……………」

俺はゆっくりと更衣室に向かった

「時間……………あればいいけど」

俺は結菜さんが呟いた言葉を知るよしも無かった

ソウを意識しだしたのはお母さんの死だった、お母さんの死体を見た瞬間、俺の中で何かがキレた……ソウを独りで守らないといけないという責任感と家族を失った喪失感……………俺は周りに感情をぶつけた……心の中ではただの八つ当たりだって気づいてた……

……けど、あいつは……………

『やっと、自分の気持ちに素直になったね……………いいんだよ、俺にぶつけて……………受け止めるから独りで全てを背負わないで……………俺はシュウのそばにいるから』

陽平さんと俺は驚いた俺たちにとってソウはただ守られていた存在だった……………いつもそばにいたのにこんなに強いなんて知らなかった……………知ってたんだ……………
…ソウは……………俺が無理をしていたことを、優等生って区切られることを、両親の期待に答えられなくなったらどうなるか……………
……………

ただ羨ましかった……………なにもしくとも愛されていたソウが……………けど、アイツは俺の知らないところで深い闇を抱えていたんだよな…

「うーん…」

朝か…俺はベットから起き上がるとリビングに向かった。

「おはよ…ご飯できてるぞ」

スーツを着込んだ上にエプロンを着けている雅樹は若干疲れたような眼をしていた

「…はよ、朝帰りだった？寝てても良かったのに」

「いや、今日は本社に呼び出しを喰らったから早く起きたんだよ…」

「そう……………だから、似合わないスーツ着ているんだな」

雅樹は俺の頭を小突いた。

「余計なお世話だ……………そういう朱も制服はにあつてないだろ」

「悪かったな…」

オレンジに近い赤のおかげで遊び人って勘違いされてギャルにしかくく付きまとわれたりして面倒なことに

「そんなことより、ほら」

雅樹はパンと目玉焼きとベーコンとコーヒーを手渡した……………俺はパンにバターを塗り、コーヒーに砂糖とミルクを入れて座った。

「相変わらず、ブラックは苦手か？」

「悪かったな」

「悪いとは言ってないだろ……………お前にも可愛いところがあるんだな」

嫌味かよ

「……………で何やらかした、滅多にないだろ本社に呼び出して」

「……………実はバーの報告書を1週間も忘れていてさ……………昨日、徹夜で仕上げたんだよ」

……………またか

「社長さんに同情するよ……………いつもこんな感じで」

「海斗にも似たようなことを言われたよ…」

海斗？まさか……………

「海斗さんの名字って結崎？」

「そうだけど……………どうした？」

「いや………………ソウと同じ名字なんだよ……もしかしたら何か知ってるかも」

「あれ？七海じゃあなかったけ……………蒼君は」

「ああそうだけど……………名字が転校してきたときから違うんだよ」

「あの鉄仮面がね……………聞いてみるは……………まあ……ある意味シュールだな、他人に興味を示さないアイツが……………か」

困ったような、嬉しそうな表情を浮かべる雅樹は何故か切なそうだった

朝ごはんをたいらげて洗面所に向かった……………いつも通りに顔を洗うとそこには最愛の人と同じ顔があった。

「…」

不思議と欲情したりドキドキしたりしない……………ただ、そこにアイツと同じ顔の少年がいるだけでそれだけのことでだからなに？ って感じだ、俺は素早く歯を磨き、制服に着替えて家を出た。

いつもの駅から電車に乗って学校に向かう……………いつもと同じ風景を

眺めていると………って言って満員電車だからそんないいもんじゃないが………人ごみの中に海の色に近い蒼の髪をした少年を見つけた、たいして驚くことでもなく、何処かで見たかな………と思って見つめていると………

「同じ制服？ 光葉学園生か」

ネクタイを見ると同じ青なので1年生だ………だけど、あんなやついたか？………1つめの駅に到着した………人混みが流れていき、そいつの容姿を見て驚いた………華奢な体型に碧眼と蒼い髪………そして、自分と同じ顔………

「ソウ………」

ソウは本を読むのに夢中で俺には気づいてない………どこに住んでいるかは知らないがあの家ではなさそうだ………もしそうならこの電車に乗らないはずだ………そうだとすればなぜ………ソウを見つけてから俺は自分の胸の高鳴りを感じていた………自慢ではないがこれでも中学の時はそれなりにモテたが誰とも付き合わなかった………また“あんなこと”になるのはゴメンだし、女は………
………ていうか、執着心の強い人は苦手だ

「ふあゝ」

ソウは欠伸をした……そのわずかな動作でも美しく感じた………
…しかもそう感じたのは俺だけではない通勤中のOLや通学中の女子学生もソウに釘付けた………3年前ですら凄い色気を醸し出していたのに成長して大人の艶やかな色気を出している、わかってはいるがソウは周りの欲のこもった視線に気づいてはない………
……危なっかしいなアイツは………思わず苦笑してたら駅に到着したみたいだ、ソウを探したが見当たらない…先に降りたのだろう、俺も慌てて降りて学校に向けて五月の澄んだ空の下を歩いた

【4】

あれから1週間たち……中間テストも既に終わり結果を待つばかりだった。

「あーだる」

「結崎くん？テストはどうでしたか？」

「他人の心配より自分の心配しろ」

コイツはいつからこうなったんだ？

「ソウ…お前、ちゃんとテスト勉強したか？」

「……………昔は格好良かったのに…」

コイツ…

「……………どういう意味だ？ソウ」

「……………別に…あと和哉？俺がテスト勉強に付き合ってたんだから……………赤点取ったら…」

「……………だ　大丈夫…多分　あんなスパルタ受けたから…」

どんな教えかたしたんだろう？

「あ、今回はぼくは14位です、2つ上がりました」

掲示板に順位が貼り出され歩が喜びながら言ってきた。

「げ……………俺は2位だ」

「おやおや……………七海くん？随分と不調みたいですな…」

はあ……………また面倒な人に…

「サイトウ斎藤 タツマ龍真……………テメエは相変わらず…」

「斎藤くん?……………ってあの?」

「?」

「蒼は知らないんだ…」

「……………」

「斎藤 龍真…あの結崎 左条院財閥の次に大きいとされる斎藤家…」

「……………」

「この光葉学園では理事長と帝王以外はさかえないんだよ」

「……………」

「中学の時に俺がテストで龍真を抜かしてから目の仇されていて迷惑しているんだよ」

「……………」

「…フン、今までまぐれで勝ってもこれからはそうはいかないからな…」

「……………ZZZZ」

「「「こんな状況で寝落ちかよ（ですか）」「」」

ソウは俺たちを睨み付けた。

「……………どうでもいいことで騒ぐなよ……………あと、斎藤くん？万年2位から3位に昇格おめでとうございます…」

俺は面倒臭そうに掲示板を指した。

「なにを…」

龍真は掲示板を見て凍りついた。

「嘘……」

「じゃあ………1位の人……」

歩は気まずそうに尋ねてきた。

「………え〜と………何々？ ユイザキ ソウ？ ……ソウ……お前……
なんで」

コイツは相変わらず………頭いいな

「確か………中学の時……1年間ずっとオール百点だった……気がする」

「さすがに双子………頭も同レベルなんだ………はははあ」

結城は今さらながら驚いているし………確か、幸人はソウと知り合っていたか？

「う〜んまあそんなもんだよ」

「久しぶりだな……結崎」

「帰りに本屋に寄りたいからそろそろ帰るな？」

「おい」

「俺もBーぐはぁ」

ソウは軽く和哉にボディープローをかました。

「自重しろ………だったらついでになんか食べに行こうぜ……」

「ねえ……シカトは一種の虐めだよ……」

「俺は料理の本と新作の文庫本を買いたい……」

「じゃあ……行こうか……七海と小日向はどうする？」

「えーと……行きたいですけど……」

歩は幸人を憐れんでいるし……いいやつだな……
幸人には同情しないが…

「俺も行くよ…しかし、ソウ…幸人を凄いくらいスルーしたな…」

「褒めてもなにもでないよ…」

……褒めてないけど…

「僕もどうしてもって言うなら一緒に行っても良いよ…」

「よし…俺も行く」

「シュウ、小日向くん、和哉…さっさと準備して行くよ…」

「おーBえゴハア…」

ソウは軽く和哉のみぞおちを殴った。

「お前は自重という言葉を知らないのか？ 全く……いつか痛い目に遭うぞ」

「え？ どういう意味？」

どういう意味だろ？…ソウは呆れているけど…何処と無く安心した顔をしてるけど。

「なんか……………七海くん以上の強者ですね…」

「ああ…」

割りとおの頃より明るいソウ見た俺は嬉しい反面……………
……………その笑顔を向けられる結城に嫉妬していた。

ソウと和哉は目的の本が買えてウキウキ…俺と小日向くんはどこかの誰かさんのせいでフラフラ…

「……大丈夫？ シュウと小日向くん？」

「誰のせいだよ（ですか）」

あれ？ 何故かソウの機嫌が悪い気がする…

「………眼鏡とへたれ君？」

「それは誰だよ」

確かに疲れる人達だが…

「仲いいね……四人とも…」

「」「良くないから」

「……………はははあ…なんか会話が成ったってないけど…」

歩……………疲れた顔して…

「小日向……………大丈夫か？」

「そんなに仲良くしても和哉しか喜ばないよ」

「「「は？」」「」」

「実は俺……………腐男子なんだ」

「ふだんし？」

歩が……………呆けてるし

「なんだ？腐男子って」

「腐女子って知ってる？」

「……………ああ」

呆然としたまま、俺は答えた。

「と同じで男同士の恋愛を見るのが好きな人のこと…」

「……………凄いカミングアウトだな…」

「えゝとなんで結崎くんは知ってるの？」

「うん？ああコイツそれで中学の頃、虐めにあっていたし…………てか、
言って良かったの？」

虐めって…………

「うん…蒼の兄貴だし、気にしないかなって…」

結城は一瞬、切なそうな顔して苦笑した。

「僕は心が広いから別にそんなことは気にしないよ…」

「まあ…俺は格好いいから妄想したくなる気持ちはわかるぜ」

「「あ…いたんだ？」」

「少し…いや、軽く空気だったよね」

……………俺も忘れてた。

「なんだと」

「蒼…ここのフレンチにしようよ」

「いいよ…」

「……………頼むから少しは人の話を聞け」

「断る」

はあ、即答かよ

「……………で、値段を考えず食べたらお金が足りない…」

ソウは伝票を見てため息をついた

「シュウ…………お前は飲食店でバイトしてなかったか？」

「……………たかが飲食店のバイトではこの額は払えないです…」

ヤバイな…どうしようかな？

「……………四人で約2万円ですか…」

一人…5千円かあ…

「……………仕方無い…今日は俺の奢りにしときます」

「大丈夫なのか？」

流石に罪悪感が…

「……………お前の財布……………カード以外入っていないじゃん大丈夫なのか？」

「……………いつ、見たんですか？」

「……………本屋で少し…」

「……………最近、お金で買い物したことあまりないんだよな…」

「……………え？じゃあどうやって？」

「そりゃ……カードで……まあ海斗さんが金持ちだから金銭面では心配は要らないからな…」

そういえば、社長なんだよな？海斗さんは…

「ホントにいいんですか？」

「ああ2万くらい大した出費にならないし」

「お前はどんな生活を送っているんだ？」

ソウは俺の耳元に近づき囁いた。

「内緒」

コイツ…色気を増してないか？……………

「まあ……………海斗さんは何気にセレブですからね…その上子煩悩に金銭感覚皆無と素晴らしい方ですからね…」

ソウは呆れているし……………雅樹の話だと、冷たい人みたいだけど、どうやら上手くいってるみたい…

「蒼？月のお小遣いはいくら？」

「……………10万」

「……………年間？」

「……………月間…」

は？…

「まさか…………身売りしてないだろうな」

「してないって夏休みにシュウにも紹介するよ…それよりはデザートはどう？ここね…デザートも人気なんだよ」

何で夏休みなんだろう……って仕事の関係か？

「じゃあお言葉に甘えて頂きます」

「あー食った食った…」

「食べ過ぎ……」

「結崎くん…今日はご馳走になりました」

「まあ気にすんな」

「解散するか？」

もう8時か…

「みんな何処に住んでるの？」

「僕は駅前のマンションに両親と…」

「俺も小日向と同じマンションで両親と…」

へえ…

「俺は住宅街で従兄弟と主に二人暮らし」

昔の俺たちの家の近くだな

「……………さぞや、楽しいだろう？」

「うん……………いい人だし、楽しいよ」

ソウはこっそりため息をついたけど……………どうしてだろ、時々…ソウは意味がわからないこと言うんだよね……………意味深で逆に怖いな…

「俺は最近出来た、海岸沿いにある高層マンションの近くのバーの二階に住んでいる…」

「凄い近く……てか、そのマンションに俺は住んでいる…」

「…マジ？でもなかなか見ないけど…」

少し前に電車で見たけど……それきりだし

「最近になって引っ越して来たんだよ…じゃあ…一緒に帰るか…」

俺たちは近くの家同士で帰った

気まずい……三年間という時間はどうも俺たちの壁になっていた。

「ソウ？」

「シュウ？なに？」

「父さんはどうした？」

どうやら思い出したくないことまで思い出した俺の声には怒気が含まれていたのかソウは眉を上げた。

「……………死んだよ……」

「…………ソウ？」

ソウ無表情で答えた。

「……………シュウが家を出てから一年後に交通事故で……話はそれだけ？」

あまりにも淡々と答える俺はソウの顔を見て焦っている。

「ソウ？俺がいない間、何が

別に…」

「はあ？」

「何もないよ…」

「何もない……って、嘘だろ？お前なんか変だぞ…」

「だから？」

ソウは物凄い冷たい表情をしている。

「……………なんだよ…いい加減に拗ねてないでちゃんと話せよ…」

俺は苛立ちを隠せずにいる……長年の勘で悟ったソウは：

「俺に頼らないで自分で調べたら？」

昔からソウに口喧嘩を勝った試しがない俺はこれ以上の詮索は無意味だと気づいた。

「じゃあ…ね」

ソウは俺に眼をあわずに別れを告げて自分のマンションに向かった……ソウに親のことはデリケートな問題だ…自分の感情を優先させた自分自身に憤りを感じたが……ここにおいても仕方ないので家に帰ることにした。

「ただいま……」

「はあ………」

帰ってくるなりため息かよ

「雅樹…どうかしたか？」

「いや…何でもない…」

俺は何か引っ掛かったがソウのことに頭がいつてる俺は気にせずにお風呂に入って寝た。

【5】

朝…何時も通りに朝食を食べてるとずっと黙ってた雅樹が変なこと
言ってきた。

「最近……お前…落ち着いてないか？」

あれから1週間の月日が経った………ソウとは一応…隔たりなく
接してるが問題が解決できたわけではなく…ふたりになると気まず
い空気が漂う…

「そうか？」

そんな状況で落ち着いてるとは思わない…

「落ち着いているよ………お前がこの前…ソウと喧嘩しても
情緒が安定してるし…もっと…不安定になると思ったし…」

「まあ…一応…兄貴だし、お互いに大人ならないと…」

「大人…ねえ、お前の口からその言葉を聞けると思わなかったな…」

雅樹は苦笑した……

「まあ……俺もソウと再会しなければそういうこと言わなかっただろうな」

「どういう意味だ？」

「俺はソウを守るために生まれたからな…」

「ほお…」

「今…中二病だと、思っただろ？」

「うん」

「テメエ………まあ、そうだな…けど、そこまで自分に自惚れてないぜ…」

もし、そうなら双子の線を越えられない…

「ますますわからない…」

「要するに役割の問題だよ…雅樹が言っただろ…俺は情緒不安定…
って」

「ああ…」

「それは昔も変わらない…ソウは身体が弱い分…精神的に強い
だよ…両親はソウを鬱陶しがってたからな…それを乗り越えた分…
強いよ…アイツは自分自身や周りが思っているほど弱くない…恵
まれた環境で生きていた俺と違って…俺の役割はソウは守るこ
と…ソウの役割は俺を導くこと…そうでないと双子の線
を越えられない…」

実際…苛めにもあっていても周りに悟られないよう振る舞えるから
な…多分、俺が気付けないとなると誰も気付けないだろう
な…気を付けないと…

「なるほど…」

雅樹は納得したようにうなずいた…

「基本的に俺たちは正反対なんだよ…俺はソウより運動能力に優れているけど…ソウは感性や繊細さが必要な芸術タイプだし……俺は他人……ソウ以外の人の感情に疎いし、ソウは人の感情に鋭い分…自分自身に疎い」

「なるほど……双子だからって同じ人間って訳なんだな…まあ朱みたいのがふたりもいると俺がたまったもんじゃあない…」

最近………ソウのことで雅樹に弄られっぱなしなんだが気のせいか？

「悪かったな…」

「はは…つまり俺の安眠はソウにかかってるわけか…」

「雅樹が望むなら期待に答えるぞ？」

俺が手の関節を鳴らすと呆れたため息をついた。

「答えなくていい……まあ……お互いが必要ならまだやり直せるだろ…」

雅樹は暖かい笑みを浮かべていうが…

「やり直せる……のか？」

「やり直せる以前にお前はソウがいないとダメだろ？なら多少は辛い思いをしてかも頑張らないと……」

肩をすくめていう雅樹に確かにとうなずいた……

「だな……行ってくる」

いつもと変わらない青空の下をゆっくりと歩いた……

午前中の授業も終わり……俺は雅樹がご丁寧に作った弁当片手に人気のない所を探して校内をさ迷った……

「おい……………そのワルガキ…何してる…」

「相変わらずの挨拶ですね…貴志さん」

成田^{ナリタ} 貴志雅樹^{タカシ}の幼馴染み……………

「なにコソコソして……………また面倒を起こす気か？……………やるなら俺のいない所でやれよな…」

この不良用務員は…

「違う……………人気ない所で弁当を食べようとしただけだ…」

「明日は雨か？……………まあ…だったら用務員室で食うか？」

どういう意味だ、コラ

「貴志さんがそういうなら雨だろうな…」

「うるせーとっと着いてこい…」

俺は貴志さんのあとに続いた…

「意外と広いんですね」

そこは結構、広く台所どころか簡単なシャワーまで付いていた…

「ああ…適当に座れ」

「意外に綺麗好きなんですね…」

「ただ物を置いてないだけだ」

確かに殺伐している。

「お前……最近は大人数だな」

またかい…

「どうして？」

「最近…雅樹が元気でたまらん…少し荒れろ……俺のいない所で…」

貴志さんはウンザリしたようにテーブルにもたれた…

「御愁傷様………雅樹にも同じこと言われたよ…」

「お前の最初拾った時はビックリしたぜ…」

「はは………」

【6】

「彼女か…崎原^{サキハラ} 恵^{メグミ}だ」

小学5年の冬休みにいきなり父親……………隼人^{ハヤト}から紹介された…

「はあ…………七海 朱です」

俺も自己紹介をしたが訳がわからない…

「この人が朱くん?…かなりカッコいいね…」

「どうも…」

ガラッ…

「ただいま…………あれお客さん?七海 蒼です」

ソウは崎原さんに屈託ない笑顔を向けた…

「私は崎原^{サキハラ} 英^{スグル}…彼女が娘の恵だ…よろしく頼む…蒼くん」

「恵です…蒼くんは綺麗な人だね…」

「ありがとう…」

「すまないが今日は帰らないといけなんだ…またな…」
英さんと恵さんは家をあとにした………親父も仕事があるからと
家をあとにした

「シュウ？」

ふたりきりになるとソウきまずそうに俺を呼んだ…

「なに？ ソウ…」

ソウの碧眼が何故か鋭い…

「僕………なんだろ…シュウ…なんか…あの人と関わりたくない」

「は？…どういう意味だ？」

「わかんない…でも、嫌な予感がする」

不安がるソウにキスをした…

「嫉妬？」

ソウは首を傾げた…

「違う………いや、自分でもわからない…」

「それより…早くご飯を作ってよ、これ以上待たすならソウを食べちゃうよ…」

俺が耳元で息をかけながら言うのと真っ赤になりながら台所に向かった…そんな後ろ姿を見て声を抑えて笑った。

この時のソウの予感を甘く見なければよかった……そう
すれば、まだ一緒に居れたよな……ソウ

【7】

「はあ…」

ソウの嫌な予感的中した

「どうしたいいんだろ」

ソウは今…病院で入院中で俺は今からお見舞い…

「はあ……あーのくそ親父……余計なことを……」

たまに帰ってきたと思ったら……上手く断らないと……遠回しにソウに相談するか……俺はソウの病室の扉を開けた。

「シュウ!!」

俺の最愛の人は俺に向けてとびきりの笑顔を向けた……

「ソウ？ 来てからすぐで悪いんだけど……相談したいことがある……」

俺はベッドに入ってソウを抱き締めた……

少し痩せたかな？

病衣のサイズからしてもかなり小さい方だろう……

「相談ってなに」

「……ああ、実は……」

「つまりまとめると友達が親に無理やり好きでもない人と結婚させられそうって？」

「…うん」

友達がつてところ以外は本当……くそ親父が会社の上司の娘と俺を……つまり恵さんと俺を結婚させようとしてたんだ……

「あのさ………シュウってそんなに仲のいい友達がいたっけ？」

………もしかして墓穴を掘った？

「それにその友達を知らない僕に相談するより知ってる人に相談した方がよくない？………來とかなら遠回しに言う必要はないし………シュウが僕に意見を求めるって時は大抵は僕たちのこと………もしくはかなり親しい人たちだけだね？………それ以前にシュウなら『好きでもないなら断れ』って言うだけだと思うけど」

鋭い………浮気したらすぐにばれるな……まあ、しないから関係ないけど……

「……そうか？」

「……それは置いといて」

助かった…

「現状じゃあどうしようもないよ………とりあえず…お互いによく知らないからって現状維持をするしかないよ」

「だけど…そいつは好きな人がいるんだよ」

「だとしても…一方的に断ったらその子に失礼だよ…親同士の約束事とはいえさ」

上手い断り方を聞くはすだったのに…

「………時間さえあればなんとかなるよ…相手にも好きな人ができるかも知れないし…それに今下手に騒いだらその子の好きな人に危害を加えるかもしれないし…」

俺は思わず息を飲んだ………

「そうか……そうだよな……やっぱりソウに相談して良かったよ」

「徐々に距離を置いてある程度大人になってからはっきりと断るべきだよ……」

そうだな……今の俺じゃあソウを守りきれない……ソウはいつも冷静に事を見ている………ひ弱そうに見えて芯はしっかりしている……迂闊に事を大きくなると今の病弱のソウを傷つけてしまう………お互いに強くなるのを待とう……ソウの体が成長して免疫力が強くなって………俺がソウを養えるくらいに経済力を身に付けてから………ふたりで生きていこう

「………シュウ？どうかした？すごい顔しているよ」

「何でもないよ」

俺はソウに笑いかけた………それにソウもつられて笑顔になった………あ……愛しい人……ソウを失うわけにはいかない………例えどんなに辛い運命が訪れようと………例えすべてが敵になろうが……ソウ以外の愛が偽りになろうが……ソウと手を繋いで歩いていけるならそれでいい……

「……………ソウ？」

「……………うん」

俺はソウに触れるだけのキスをした…甘い刺激は俺の憂いを吹き飛ばしていく……

「……………シュウ」

頬を赤くさせて俺を見上げている……………

「……………ソウ」

俺はソウと向き合い指を絡めた…俺は碧眼を見つめた……………吸い込まれそうになる…澄んだ蒼い瞳に薄い茶色が入った黒髪に明るい茶色の瞳…ソウに似ている顔がうっている

「シュウ？」

「……………二人だけの世界だ」

ソウは戸惑っている…

「……………真っ白な病室はまるで俺たちだけの世界だ……俺の瞳はソウしかうつさない…

「……………僕の瞳はシュウしかうつさない……例えば……シュウが僕を愛してなくても……例えば……シュウに僕以外の人を愛して…

「ないよ……絶対にない……ソウ以外はいらない……世界に許されない恋だとしても構わない……ソウと手を繋いで歩いていけるなら全てを捨てる覚悟はある……全てを犠牲にしてもソウを守る…」

ソウの蒼い瞳が揺れる

「不安なんだ……シュウと僕は同性で双子……兄弟……“兄と弟”……本来なら近くても混じることはない……“二番には一番にはなれない”……はずなのに……シュウは太陽……明るい光……何でもできるし……これからは色んな人に必要とされる……僕は月……淡い光……身体は弱いし……誰にも必要とされない……結局は太陽と月……月は太陽の光に照らされて輝く……僕はシュウが必要……シュウは？」

ソウは不安なのか……絡めた指が緩んだ……俺はまた指を深く絡めた…

「俺はソウ以外を好きになったことないよ」

絡めた指が離れた：

「……………僕はシュウを好きじゃないよ…」

ソウがそう言った瞬間に強い衝撃を受けた…………強く舌を噛み締めた
…………気を抜いたら涙が出そう……

「……………僕はシュウを愛してる…………愛されたい…愛しいんだ…………一生を共にしたい…僕もシュウを支えたい…………全てをかけても守りたい」

ソウは俺の首に手を回した…………その瞳は潤んでる…表情はとても美しい……………まだ、幼い俺はその美しさを表現できる言葉がなかった……

「……………ッ…ソウは俺をこんなに愛させてどうしたいの？…俺はいつもこれ以上は愛せないって…………思うのに…ソウと時間を共にするたびにどんどん愛しくなっていく……………」

俺はソウにキスを落とした……………深くて激しくて甘いキスを…

「…………ふぁ…………んんッ」

……俺はしばらくソウを味わった……ソウは顔を真っ赤にしている
……蒼い瞳はトロンとして少し乱れた病衣から見える腕や太もも
……胸はなんとも言えない衝撃を身体の内から受けた……

「もうこんな時間かぁ……今日で春休みも終わるか…」

明日からは新学年……………めんどくさい…

「……………今度はいつ来るの？」

そんなの聞かなくても分かるだろ？

「明日」

「無理しなくていいよ……シュウも疲れてるだろ？」

疲れてるからソウに会いに来るんだけど…

「ソウは心配性だな……大丈夫だって」

「……………うん…また明日」

ソウの額にキスをした。

「……………じゃまた」

俺は名残惜しが病室を出た……

「朱……」

少し晴れた気分に浸っていると待合室で待っていたらしい陽平さんに呼び止められた。

「……………ようやく終わったか……………送っていくぞ」

陽平さんと帰宅した。

「……………」

「……………」

気まずい……………俺も陽平さんとあまり話す方じゃないし…

「……………どっか寄るか？」

「ぐうゝ」

俺が返事をするより先にお腹がなった……………

「……………ブツ……………聞かなくても良かったみたいだな…」

「……………ッ」

俺たちは近くのファーストフード店に入った…

「いつから居たんですか？」

「お前が来てからすぐだ…」

「じゃあかなり待ったんじゃないですか？」

俺はハンバーガーをかじった…

「……………適当な時間になったら呼ぼうとしたけど…お前らがイチヤイチやっていたから終わるのを待っていたんだよ」

あれを見られていたのか？

「……………ッ」

「そんな顔をするなよ……」

「陽平さんは驚かないんですか？」

「……………ああ……お前はともかく……蒼は彼女はできないよ」

ソウは結構モテると思う……………綺麗だし、頭はいいし……可愛いし……

「女って嫉妬深いだよ……………かなりな……………まあ……かなりさっぱりしたやつもいるし……………男にもかなり嫉妬深い奴もいるけど……………まあ……………それは置いて……………蒼は綺麗すぎるんだよ……………男は単純に綺麗な物を求めるからな……………蒼は色んな人に執着されたり……妬まれたりするだろうな」

かもしれない……………来や俺はソウにはとことん甘いと思う……………周りの人にはかなり冷たいってよく言われる……………来と初めて会った時はお互いに距離を置いていたが今はかなり親しい関係を持っている……………口数の少ない来が話すのは俺かソウだけだ……………クラスにも最近……ソウの荷物を持ったり体調を気遣う人が少し出てきた……………そのほとんどが男だ……

「……………」

「……………そんな深刻な顔するなって……………しかし……………お前たちは本当にお互いが好きだよな？……………お前たち以外の一卵性の双子を見たことがあるけど……………朱と蒼以上に仲のいい双子は見たことない」
そうか？…俺たち以外の双子に会ったことが無いからな…

「今は異性同士でもそこまでラブラブなのは珍しいぞ」

「そうなんですか？」

「まあ……………ラブラブなのはいいが気を付けろよ…俺みたいに“理解ある人”ならバレても構わないが嫌う人はとことん嫌うからな…」

「……………はい…気をつけます……………そろそろ帰りますか？」

「そうだな…明日も仕事だし…朱は学校だろ」

時刻は9時を過ぎている

「サボってソウのお見舞いしようかな？」

「程々にしろよ？」

陽平さんは俺の頭を突つついた

「ちゃんと学校に行けっでは言わないんですね」

「言っても聞かないだろ？」

「……………まあ、そうですけど」

「はあ……………まあ……………いい、帰るぞ」

俺たちは静寂が支配する住宅街に向かった……

【8】

昔の出来事を思い出したらいつの間にか6限目……………

「……………と七海さんと僕と結崎さんのグループでいい」

「……………ああ…」

何故か世界史の調べ学習のグループがソウと一緒に……………

「七海？今日は空いてるか？」

「空いてるけどなに？」

今日は確か4時くらいで終わるはず……………あの雅樹がマスターを勤めてるバー……………というよりは飲食店は朝と昼は食堂に……………夜はバーになる……………飲食店は別の人がマスターだから詳しくは知らないし……………料理の苦手な俺はバーしか手伝ったことがない……………料理の得意な緑は詳しいと思うけど……………

「あ！そうだ……前に言ってた七海のバイト先に行こうよ」

なんで…そうなる？

「こと「残念です……僕も行きたいですけど……今日はあいにく用事が入ってしまったて……」

小日向？俺は許可してないぞ？

「残念だな……仕方ないまたの機会にな」

結城………何度か行きつけの店にする気か？

「今日は……イベントがあったよう「……大丈夫……今日はバーは休み
なはず」

なんで知ってるの？

「はあ……もういい……分かったから」

何を言っても無駄か……

「じゃあ放課後ね…」

気が重いな……って……あと少しで6限目も終わりじゃん……てか、
今チャイム鳴ったし…

「お前らとつと帰れ」

仕事しろ…ホスト教師……まあ……いい……今のうちに逃げるか！

俺は入学して最速のスピードで支度して帰った…

「うん？雅樹からか？どうしたんだろ…」

サクッと家にかえってゆっくりしてると雅樹からメールが来た……
何だろう……酒の仕入れの手伝いか………とりあえず……降りてみる
か…

ガチャ……

ボタン……

「……………」

無言で走り去ろうとしたら雅樹に呼び止められた。

「こら！ 朱…約束を破ったら駄目だろ…」

「結城！ なんているんだよ」

カウンターでバッチリ居座っている結城は不思議そうな顔をした…

「なんで…って、行くって言ったじゃん」

「その前になんでバーの場所を知ってるの」

「海斗さんに聞いた…」

「海斗さんに……ってオーナーから？」

「立ち話も何だろう…座れよ…朱」

雅樹は俺の分まで飲み物を入れた…

「チッ…」

俺は渋々結城の隣の席に座った…

「海斗と知り合いなんだ？和哉君は？」

「はい…蒼関係で……知りたい？」

「……………」

コイツ……わざわざこれを言うだけに？

「和哉君は知ってるのか？」

俺の苛立ちを察して雅樹は話を進めた。

「はい………その前に……七海……」

「なんだよ」

「蒼のこと………好きだろ？……恋愛感情で」

「……………ッ」

コイツ………マジでどこまで知ってるんだよ……

「なんで……和哉君が？」

流石に雅樹も驚いてる……

「うーん…腐男子だからってことで」

「答えになってねえよ」

思わず大声を出してしまった…

「でもさ…七海って密かと蒼を目で追ってるよ」

「見るだろ？普通は…三年間離れたんだから…」

なんとか誤魔化した……ように思えた…

「なら…蒼を貰ってもなんの問題ないよね…」

「……………なんだと？」

思わず結城の胸ぐらを掴んでしまった…

「お、おい…朱」

「冗談だよ…七海…」

これは認めたも同然だ…

「やっぱり……か…嫉妬………していた………だろ？………俺に」

否定は出来ない…でも…どこかで自惚れてた………俺はソウの1番の理解者だと………ソウは病弱で入院ばかりで人付き合いはないから三年間経っても変わらない………と思っていた…結城さえ現れなければ…

「…」

「……和哉君は相当、蒼君と仲がいいかい？」

雅樹も少し警戒してるし……

「うーん…いいと言うよりは蒼の俺の憧れだから」

結城のことも気になるが今はソウのことが気になる………俺は雅樹

とアイコンタクトを取った……………どうやら伝わったらしく話を進めてくれた。

「丁度、聞きたいことがあるんだけど…」

「なに？ 答えられる分は答えるよ？」

「今……………蒼君はどういう暮らしをしてるのか知ってる？」

今……………1番に気になる話題を選んでは……………長年一緒にいると意志疎通が楽で助かる

「海斗さんと二人暮らし……………知らなかった？」

「この前は海斗が忙しくて聞けなかった……………でもなんでまた？」

雅樹は俺に代わり色々質問をした…

「うーん…俺は中学の頃の蒼しか知らないから詳しくは知らない…けど…海斗さんはいいい人だし……………何より蒼に独り暮らしはキツイと思うよ？……………身体が弱いし」

「……………アイツがねえ…まあ…少しは安心だな？朱」

小学の頃に俺の知らないところで知り合っていたのか？……………まあ…
雅樹の幼馴染み……………悪いやつではないだろ…多分

「俺からも質問をしていい？」

俺と雅樹は顔を見合わせた……

「……………いいけど…なんだ？」

「蒼をどうしたい？」

ストレートに聞かれて俺たちは戸惑った。

「どうしたいって……………どういう意味だ？」

「告白するの？……………って聞いているんだよ」

嫌な汗が身体中から沸き出る感覚に陥る…

「いや」

なんとか絞り出された声は小さく動揺してるのがバレバレだ…

「どうして？」

頼むそれ以上は聞かないでくれよ…

「許されないから…」

雅樹はお互いに必要としているならやり直せるって言ったけど……
無理だよ…思い出した……自分の罪深さに…

気付いてたらバーを飛び出していた……雅樹の家に着くと携帯が震えた……

「もしもし…」

『七海くん？』

「小日向か？どうした……」

『いえ……どうしたのかなあ……って気になって』

「どうもしないよ……わざわざこれだけのために電話したのか？切るぞ！」

正直……今はひとりになりたい

『あの……もしかして不機嫌なのは結崎くんと関係があるですか？』

また……ソウかよ……最近はそればかりだな……

「なんでまた？」

『今………結崎くんと居るんですけど……なんか浮かない………と
うか悲しそうな顔をしてるから……』

「それはまた珍しい組み合わせで……」

『七海くんと結崎くんはけんかでもしたんですか？』

した……かな？

「一応…で今は何してるんだよ」

『スーパーで夕御飯の買い物です』

「へえー料理するんだ？てつきりされる側かと」

『それはどういう意味ですか？』

「…なんでもないよ……………それより…伝言を頼めるか？」

「……………いいですよ」

俺は深呼吸をして精一杯の声を振り絞った……

「……………ゴメンって伝えといいて…」

『……………それって自分で言ったほうがいいですよ』

駄目だ…直接顔を見てから言えば…言ってはいけないことまで言い
そうで怖い…

「無理だよ……それより頼むな」

小日向はため息をついて『わかりました』いうと携帯を切った……

「風呂でも入るか…」

着替えを持って風呂場に向かった……

「……」

俺は三年前の夏……許されない罪を犯した……思えば思うほど……
愛すれば愛するほど……残酷な楔を……ソウに刻んだ

湯気が浴場を満たす…鏡にぼやける自分は……どんな表情か読めない……まるで今のアイツみたいに……冷たく無機質な表情を無理に
押さえつけて無邪気に振る舞うアイツは三年前の夏をどう思ってい

るのだろうか？……そしてアイツを俺は救えるのだろうか？……
真夏の白昼夢のような出来事……あの時……俺とソウのふたりの秘
密……緑に緋人……雅樹……それに結城も知らないだろう……
……知ってたら俺にソウを告白するか？……なんて聞かないだ
ろう……そしてそれは俺の罪……

「……………ソウ……」

昔は愛しい人の名前を呼ぶでも切なさなんか湧かなかった……

再会してアイツは俺に憎しみをぶつけることは無かった……殺
されても仕方ないのに……夏の暑さに狂った……いや……元々、狂
っていたかも……恵さんは……そして……

【9】

もう夏休み……あれから英さんを説得してなんとか高校生まで待つてくれることになった。

「朱くん？」

「恵さん……」

「今……学校が終わったところ？」

夏休みに登校しないといけないなんて…

「はい、恵さんって中学生なんですか？」

「ええ……朱くんってまだ小学生だったんだね……蒼くんも朱くんも大人っぽいから年上かと思った……」

恵さんはあどけない笑顔で笑った……普通の男ならドキツとするんだろうな……なんか視線を感じるし……

「朱くん……………今…ちょうど…学校が終わったんだよ…一緒に帰ろうか？」

「は？」

「せっかくだし、親睦も兼ねて……………ね」

はあ……………今日はソウのお見舞いに行けないな

「……………良いですよ」

「やった……………じゃあ朱くんの家に行こうよ」

気乗りはしなかったが大事にはできないのでしぶしぶ家に向かった

「朱くんの部屋……………見ていい？」

いきなり来て何を言ってるんだか

「……………何もないからリビングでテレビでも見ながらお茶にしません？」

「むうう朱くんってなんか冷めてない……………私は見たいんだけど？」

人の部屋は無理矢理入るもんじゃあないだろ？……………しかも拗ね方がぶりっ子みたいでイラつく……………女ってなんでこんなが多いんだろう？

「……………わかりました……………」

面倒だけど、部屋に入れることにした。

「ここが朱くんのお部屋か……………」

「はぁ…………」

恵さんは俺の部屋に入るなりいきなり辺り物色しだした…

「ねえ…朱くん？」

「なんですか？」

「好きな人……………っているの？」

「……………いるよ」

俺は恵さんの目を見ずに答えた。

「……………たさい」

「？」

「朱くんは私の……………」

恵さんはベットに俺を押した……………俺は抵抗する間もなく唇を奪われた……………恵さんは執拗に舌を絡めてきた。

「なにす……………」

バシッ……………

「……………」

頬に鈍い痛みが走る……………俺が放心状態でいると恵さんは俺のズボンとパンツを脱がした……………俺自身が生暖かいモノに包まれた……………

「……………ッ……………やめえろ……………ッああん……………んあああ」

俺の喘ぎも抵抗も無視して恵さんは俺自身を攻め立てた…

「……………ッ離せ…イク…イクちゃう……………あああああああ」

俺は恵さんの口の中でイッた……………

「朱くんは渡さない」

翌日……俺は心の整理が着かないままソウのお見舞いに行った…

「シュウ!!」

愛しい人の笑顔を見ていつもと違う感情が芽生えているのに気づいた。

「……………?…熱でも出たのか?」

ベッドの隣には洗面器に濡れたタオルと果物……………恐らく陽平さんあたりが買ってくれたのだろ…

「うん……………けど…微熱だよ」

「何度だ?」

「……………39度だよ…」

「微熱じゃないし…って寝てろよ……………今日は泊まっていくから」

ソウは嬉しそうにはにかんだ……………胸の痛み……………これは……………恐らく…

罪悪感…

昨日…あのあと俺は恵さんを抱いた……無理矢理とはいえ抱いた余韻がまだ体に残っていて気持ち悪い

「シュウ？」

「ソウ？愛してる」

「どうしたの？急に」

俺はソウに捨てられるのかな？……本当のことがバレたら

「……………」

俺は無言でソウを押し倒して貪るようなキスをした……ソウが酸素を求めた瞬間を見逃さずに俺は舌を入れた…

クチャクチャ

水音が真つ白な病室に響いた……ソウは苦しいのか俺の頭を掴み離そうとするが酸欠か力が入ってない……例え万全な状態でも力は俺のほうが強いが……

「はぁはぁはぁ……」

ソウは息を切らし、頬はほんのり赤みを帯びて……その姿に俺の理性はあっさりと限界を向かえた……

「シュウ？何してるの」

俺はソウの病衣を脱がし始めた……上半身を脱がし終わると必死に抵抗する両手を洗面器にあった濡れタオルでベッドの上に縛り付けた……

「シュウ……」

頬から赤みは消えて目はすでに涙を溜めている……俺はただソウを
味わうべく下半身を脱がし始めた……

「ソウ………綺麗だよ」

「…………ツ…シュウ?…どうした?変だよ」

ソウの手は拘束から逃れようとしたせいか赤くなっている…俺はそ
こに舌で舐めた…ソウの身体をビクツんと震わせた…

「シュウ?」

俺はソウの胸の果実を舌で味わう……甘美な刺激が更に俺を寧猛な
獣にさせた…

「……………ツ」

何とも言えない感覚にソウは身体を振らせた…

「…ひゃ」

俺はソウの膝の間に座り内腿に舌を走らせた…

「……シュ……ウウ……」

快感を必死に耐えるソウ……官能的な表情に溢れた欲望は止まることを知らない……

「……………はあはあはあはあ……………」

息を切らして涙はいつ溢れだしてもおかしくない……俺はソウの腰を掴んだ……俺を蹴ろうとするが手を縛られているせいで足は宙を舞う……俺は脆弱なソウの裸体に更なる衝撃を与える

「……………くはあ」

俺はソウの秘部に勃った自身を挿れた……息を詰まらせて苦しそうに喘ぐソウは軀を振って未知の苦痛を和らげようとしている……小6の見よう見まねのセックスなんて苦しいだけだ……なのに……俺の理性は止めてはくれなかった……俺は律動を始めた……俺が動くたびに目をつぶり苦痛に耐えるソウ……萎えたソレを手で掴む刺激を与えると膨らみを増し、艶やかな甘さを含んだソウの喘ぎ声にソウの中にいる俺自身は更に膨らみを増し限界は近い……

「うわああああ」

俺はソウの中に欲を解き放った…と同時にソウも欲を放った…

「……………はあはあはあ……………ッ……………シュウ？」

俺は再び律動を開始した…俺はまるで極上の肉を与えられた饕餮な肉食動物の如くにソウを食った…

俺は疲れきった身体を起こした…あのあと俺が眠る直前まで体を重ねた……………ソウが気絶しようがお構いなしに…

「……………シュウ？」

淀んだ虚ろな目をして俺を向けるソウ…

「ソウ！……………ごめん…今外すな」

俺はソウの両手を結んでいるタオルを外した：昨日の抵抗の証か手首が赤くなっている：

「…………ソウ：

「ごめん…………独りにして」

俺が手を伸ばそうとすると布団を深く被り頭まで隠した：

「わかった…ごめん」

病室を出ようとして扉に手をかける…………俺はもう一度だけソウを見ると…………震えていた…………ソウの額にキスを落とした。

「…………」

「…………ごめん」

ソウを見てるとまた欲望を抑えきれなくなる前に出ていきかけた。

家に着くとベットに飛び込んだ…もうなにも考えられない

「朱くん？どこいていたの？」

なんでこいつが…

「少しソウのところに行っていたんだよ」

「そうだよね………朱くんは私を裏切らないよね…」

「……………ッ…」

目が笑っていない…

「……………またしょうか？」

俺は後退る……壁まで追い詰められた……

「……………いやだ…」

恵さんの表情が一気に冷たくなる…

「なんで？」

これ以上罪を重ねたくなかった………ソウを裏切れなかった…

「俺は……俺は……」

「……………誰？」

「え？……くはぁ…」

恵さんは俺の首を締めた………息がほしくて手を外そうとするが…
力が入らない…

「だれよ…私の朱くんを奪ったのは…」

「朱くん？果物があるけど食べる？……って恵！何をしてるのよ！
」

恵さんの母親……霧江^{キリエ}さんは恵さんの手を外してくれた……

「はあはあはあはあ……」

「大丈夫？朱くん？」

果物の入ったバスケットを机に置いて俺の首の手形を見た……

「……………ろしてやる……」

「「え？」」

「殺してやる……私の朱くんを唆した人を殺してやる……」

半狂乱状態の恵さん……

「どうした？朱？霧江さん？」

「恵？」

俺と恵さんの父親も騒ぎを聞き付けてきた……

「……………誰？ねえ……………ソイツを……………」

「……………させねえよ」

俺は果物の入ったバスケットに置いてあったナイフを手にとった……
……

「……………てめえも親父と一緒に……………人を物みたいに……………」

「「朱くん！？」」

「朱？よせ」

親たちは止めようとしたが俺はナイフを親たちに向けた…

「万が一……ソウに手を出してみろ…てめえら全員殺してやるよ」

「まさか？お前……蒼のこと…」

「大丈夫だよ？朱くんを唆したは私が…

「黙れよ……もうてめえの顔なんか見たくないんだよ…じゃな…
……もう二度と会うことはないだろ」

俺はそのまま家を出た……もともと…裕福な家庭で親が帰らない
となると…小学生でもそれなりの額を持たされる……それを
使い繁華街を歩いていた…

「君……いくら？」

俺は変なおっさんに声を掛けられた…

「十万…」

「高いな……まあ…仕方ないか」

「ホントに持ってるの？」

「坊や？大人を舐めてはいけないよ？」

お腹の出たオッサンは十万をヒラヒラを見せびらかした：

「へえ……さっさと寄越せよ」

俺は家から出る際に持ってきた果物ナイフをポケットから出した：

「ひっ？きみ？」

怯えたオッサンの隙を突いて十万を奪った………そしてそのまま鳩尾に蹴りを入れ立ち去った………こんな生活を1ヶ月近く繰り返した………そんなある日…

「ちょっと……君…大丈夫かい？」

明るい茶髪二十代後半は男性が声をかけてきた……

「？」

「君……家は？……こんな所で…寝て」

…俺は人の良さそうな茶髪の男性にナイフを向けようとした瞬間…

「……………ッのガキ！」

俺は首に衝撃を受けて気絶した。

「……………ったく…いくらなんでもやり過ぎだ」

「仕方無いだろ？ナイフを持っていたし…」

「だからって…」

「お前が刺されたらソイツは良くて殺人未遂……………殺人犯になるんだぞ？それよりはマシだろ……………あと盗み聞きなんていい趣味してるな…ガキ」

どうやら気付かれていたらしい茶髪の男性が俺に近づき怪我が無いか確認した…

「良かった……………大した怪我はないみたい」

「はぁ……………お人好し…」

「大丈夫かい？君……………ごめんね痛かったろ？」

「別に……………心優しいお兄さんが手加減してくれたから…」

黒髪の作業服を着た男性は顔を歪めた…

「そりゃどうも……………でどうする？」

「なにが？」

「お前はなんでナイフを向けたんだ？」

「話せることだけでいいよ」

俺はこの半年間にあった全て話した……………ソウ以外の全てを…

「つまり…………婚約者に殺されかけたから逃げてきたと…………でどうする？」

「どうするって…」

「俺と一緒に暮らす」

「は？」

「はぁ……………またか」

俺はいきなりで頭が追い付けずにいた…

「君は家には帰れないんだろ？」

「……………あぁ」

今、帰ったらソウまで危険な目に会う…

「こいつは保護司……………つまり売春や窃盗をした……………まぁ…こいつは青少年が主にだか更正の手助けが大好きなおじさんってわけだ

……事情がどうであれ……あんな生活じゃいつかは痛いしっぺ返しを喰らうぞ……お前も少年院には行きたくないだろうし……捕まった家族に連絡がいくだろうからお前にとってもいい話だろう？」

「……………わかったよ……………」

にこやかに茶髪の男性は俺に握手を求めた……

「俺は椎名 雅樹……………ほら……タカシも」

黒髪の男性はめんどくさそうに自己紹介をした……

「……………俺は成田 貴志……一応……このお人好し馬鹿の幼馴染みだ」

「君は……」

「……………七海 朱」

「ナナミ シュウか……よろしくな……疲れてるだろ？ ゆっくり休みなさい……あと……同じ屋根の下で暮らすから呼び捨てでな……」

「言われなくても……」

俺は布団を被り一眠りした。

再び目を覚ますと路上ではなくこじんまりとした部屋だった……
さっきのは夢ではないみたい……

「目が覚めたかい…朱…」

「なに？」

雅樹は俺の頭を撫でた

「さっきまでうなされながら『ソウ…ソウ…』って叫んでたからさ
…」

雅樹の言葉でソウを思い出した……今まで生きるのに精一杯でソウのことを考えずに済んだのに……

「朱?…なんで泣いてるの?」

「ソウウ……」

俺は布団に顔を埋めて泣いた…

「なにがあつた話せるかい?」

俺は静かに頷いた……ソウ以外でこんなに簡単に心を開いたのは初めてかも知れない……いや、もしかしたら誰かに聞いて欲しかったのかも…

俺は大まかなソウと俺の関係を雅樹に説明した…

「……………つまり、朱は双子の弟……………蒼君と好き合つていて出ていく際に置いて来てしまった……」

引いて当然だな……………いきなり自分にナイフを突き付けて…慈悲で

拾ったら近親相姦していたなんて………その上、強姦したなんて言えなかった…

「……………ぷっ」

「あ？」

「ああ…ごめんごめん…いやあ…可愛い所があるんだな……………
って思っ」

「……………引かないのか？」

「いや……………しかし…難儀なもんだな…そこまで惹かれてるんだ？
蒼君に？」

惹かれるかあ……………知らないな…いつの間にか心の中心だった…

「……………ふふ…」

「なにがおかしい」

「今まで無表情だった朱が表情豊かになったから……まあ……明日にでも買い出しに行くか？ 朱の日用品を買いに」

はあ……こんなに思い合っていたのに裏切ってしまった………残酷なくらいに……

【10】

俺はシャワーを止めた……思い出したら妙な感覚がこびりついて洗っても洗っても消えることはない……けして…

「はぁ…」

あの時………思い出すとゾツとする一方……何とも言えない快感に襲われる………突き上げるたびに荒れる吐息に今の澄んだ蒼い髪とはちがう乱れる漆黒の髪……快感に震える汗ばんだ裸体……涙をこらえた瞳は限界が近づくとこぼれ落ちる雫……恵さんとのセックスは記憶が曖昧でぼやけているが………ソウとのセックスはしっかりとこびりついて思い出すたびに軀が疼く…

「……………はぁ…」

風呂場から上がりミネラルウォーターを冷蔵庫から取り出した………

「結局…」

俺もアイツと同じか……相手の気持ちを考えずに気持ちを押し付けて……あんなに苦しがつていたのに止められなかった…

「……………しかし…」

ソウはなにを考えているのか？復讐？……………いや、長年……双子の兄をしていた勘だと……ない……アイツがそんなことを考えるならあらかじめ俺の居場所を突き止めとくはずだ……海斗さんなら………いや、雅樹の近くに居たから簡単にわかるはずだ……転校してきた時のアイツの表情からそれは………なら……何を考えている？……いくらソウでも簡単に許すとは思えない………ましてや急に行方知らずになるなんて………無責任にも程がある…

「うーん？……………この三年間になにがアイツにあったんだろ？」

「……………さあ？」

「うお？」

「なんだよ……その声は…」

いつの間にか雅樹がリビングにいた…

「……………雅樹かよ……………結城は？」

「帰ったよ……………そのようだと言ったのか？」

「……………まあな」

雅樹は苦笑いをして台所で夕食の準備に取りかかった……

「……………しかし……………お前は昔のことを思い出すと変わるな……」

「……………なにが？」

「表情が……………悪いことをして叱られるのを恐れている子供みたいな顔をしていた」

「していた？」

「今はなんだか……………何かに戸惑っている？」

舌を噛んで表情を消そうとする

「……………どんなことでも相談を聞くよ……………いつで

も…」

俺だけが傷ついたら話せる……

「……………」

「蒼君を傷つけるようなことはしないよ…朱の更正には蒼君が必要不可欠だからね」

何時もそうだ……雅樹は…

「……………」なあ

「なんだ？」

「……………」俺はいいけど……ソウは嫌わないでね」

「？分かった」

「……………」実は…

……なんだよ」

話しているうちに雅樹の表情は普段見られないくらい陰しくなった……

「……………これは…今の俺はなんとも言えないな……………蒼君に会わないと…流石に」

「……………はあ……………今までいつも通りで怖い……………責められるならいい…拒絶するならいい…でもさ…」

「……………蒼君に何がこの三年間にあったか……………でも逆におかしいな…」

「なにが？」

「和哉君…」

「？」

「知らないとしても……朱に告白させたそうだったし……三年間に何かがあっても三年前は会ってる和哉君なら違和感に気付いてもおかしくない……」

「?？」

「三年前は朱を憎んでいるかもしれない……なのに……」

確かに……

「結城からどこまで聞いたんだ？」

「うーん……流石に詳しく教えてはくれなかったけど……」

「……けど？」

「かなり親しい関係みたい……でも、問題なのは和哉君は蒼からどういう風に朱のことを聞いたんだろ？」

「聞かなかったのか？」

「……………いや…まさか、そんなことがあるなんて思いもよらなかったからさ…」

「……………」

「……………まあ…今度の機会に海斗からも蒼君のことを聞いてみるか…本社に行く際に…だから今は様子見でいいんじゃない？」

「……………ああ」

「……………さあご飯を食べて明日に備えよう！」
「気まずい雰囲気を払おうと雅樹は明るい声を……………」

「……………って…雅樹！こんなに作ってどうするだよ？まさか…また？」

「てへ」

「てへ……………じゃねよ…いい年して…てへ……………じゃ…しかし」

テーブルを埋め尽くす料理の数々…

「和哉君を帰さなければ良かった…」

「……………で…どうする？」

「それは……………頑張れよ？」

雅樹は俺の肩を叩いた…

「……………頑張れよ……………って食えるかよこんなに沢山」

「でも…飢えてるじゃん」

「……………喧嘩を売るのか？」

一発触発の雰囲気が漂うなかインターホンが鳴った…

「まさか…誰だろ？」

あの馬鹿（雅樹）逃げるように玄関に向かった…

「緋人に緑…いいところに来た」

あの二人か…って珍しい組み合わせ…いや…そうでもないか…

「なんだ…この料理の山は？いつもお前らはこんなに食うのかよ」

「違うよ…マスターは考え事しながら料理を作るといつもこんな風になるだよ…」

「…さあ…ふたりとも遠慮せずに食べていてね？」

雅樹はふたりを座らせた…

「……………じ、じゃあ…いただきます」

「緋人さんと緑は…肉だけ食べ過ぎ…」

「朱は野菜ばかり食べ過ぎだよね？ 緋人さん」

俺は賑やかな食卓を囲んでいた…

「……………」

「？……………どうかしたのか？ 雅樹？」

雅樹は小声で答えた。

「いや…さっきの話で仮説を考えたけど…」

俺の声のトーンも自然と落ちた…

「なにか分かった？」

「あくまで仮説だけど……もしも……蒼君自身が……いや……不用意な憶測はしないほうがいいな……」

俺は緑たちが気づかないか気を配りながら問いただした……

「……………それってどういう意味だ？」

「……………辻褄が逢うけど……証拠がない……」

「……………その仮説を聞かせてよ」

「駄目だ……朱と蒼君の関係を悪化させる可能性があるから迂闊には話せない」

「……………？」

「それに……………それが蒼君のトラウマ……………に接触するかもしれない……」

「……………トラウマ」

「あくまで仮説だ…気にするな…」

齒切れが悪いな…

「雅樹…………お前って意外とこういうこと考えること好きだよな？」

「そりゃ…………ね…推理小説とかは好きだよ…………それに…」

「…………それに？」

「他人の色恋沙汰を見るのは楽しいし…」

俺は盛大な溜め息をついた。

「…俺の周りにはどうして悪趣味な奴ばかりなんだ？」

「いや…朱が言うか？」

……………確かに…この三年間…ソウ以外の誰かと付き合うことも多々あったが心が満たされることも潤うこともなかった……………忘れら

れずに思い出す度に喧嘩やセックスで満たそうとしたが逆にソウを裏切った罪深さに苛まれて余計に忘れられず：無限ループに陥った……雅樹にはその度に学校に呼び出されたり：俺を探したりと苦勞が絶えない……只でさえバーと会社を掛け持ちしているのに辛そうな顔をしなかった……だからといって疲勞が溜まらない訳ではない……俺が中2の梅雨……緑と出逢う少し前……雅樹は疲勞で倒れた……その時の雅樹の顔の青白さにマジで死ぬんじゃないかって思った……それからは喧嘩と体だけの付き合いは止めて平穩に過ごそう……としたが元々情緒不安定な俺は家の物に八つ当たりしだす始末……なんとか雅樹以外の人の前では普通に過ごした……そんな俺に寂しい思いをさせないようにバーの休憩の合間に部屋に戻ったりとそばにいてくれた……照れ臭いけど感謝はしている……そして……ソウ……アイツと少しでも楽しい時間を過ごせて良かった……

「マスターに朱？なにこそこそ話してるの？」

「なんだ？緑？俺と朱の逢い引きを邪魔して……」

「……逢い引きって……こそこそしてないじゃん？」

「……つつこむところ……そこかよ？」

「………そういう関係だったのか？朱とマスターって？」

「なんだ？緑は朱に気があるのか？」

「コイツだけは止めとけよ……朱の節操の無さと情緒の不安定さは俺も雅樹も手を焼いたからな」

「悪かったな…」

「……………そうなんだ…」

相変わらずの他愛ない会話…それでも俺の心はソウのことで一杯だった……………もう…目を背けてはいけない……………心を乱してはいけない……………覚悟を決めよう…静かにけれど揺るがない覚悟を……………これからの俺の……………七海 朱の人生は……………俺の片割れ……………愛しい弟……………七海 蒼の為だけに使うと……………報われなくてもいい…愛されなくてもいい…裏切られてもいい…拒絶されてもいい…例え全ての物を失うとしてソウの為だけに使うと……………兄としてではなく……………恋人としてではなく……………友達としてではなく……………独りの罪人としての償う覚悟……………心は要らない……………必要なのはソウがどうやったら救われるか……………ただそれだけ

「……………また変なことを考えていたろ？」

「……………別に？てか…緑たちは？」

「帰ったよ……お前がボーッとしている間にな…蒼君のことは気に病むな……あまりにも気を使いすぎると相手に負担になるぞ…
……冷静にな」

「……………俺はいつも冷静だ…」

「嘘つけよ……まあ明日も学校だろ？お前……相当疲れた顔をしてるぞ……今日はもう寝ろよ」

「……………分かった」

俺は眠れないだろうと思ったが意外にもぐっすりと寝れた。

【11】

午前中の授業もそつなくこなしいよいよ6限目の世界史……今日
は調べ学習で班のメンバーは俺、小日向、結城……そしてソウ……
……だけど……アイツはまた貧血を起こしたらしく保健室で寝てる……
会えなくてホツとしたような悲しいような……

「結崎くん……大丈夫ですかね？」

「……大丈夫なんじゃない？」

「……七海くんは素直じゃないですね……昨日は泣きそうな声をしていたのに」

「……うるさい……」

噂をしていたらソウが図書館に入ってきた。

「あ、結崎くん……体調は大丈夫なんですか？」

「ああ…ヘーキ」

ソウはダルそうに俺達と同じ席に着いた。

「最近…ソウ…」

「…結崎くんがどうかしましたか？」

「…………いや、なんでもない」

「…………最近変わったのはのは七海くんのほうじゃないですか？」

確かに……

「あれ？結崎くんは眼鏡…」

ノンフレームの眼鏡を掛けてるソウは普段の印象とは違う知的な美人に見える……………以前、俺が雅樹の黒縁眼鏡を掛けて見たところあの馬鹿（雅樹）は人の顔を見るなり何なり3時間くらい爆笑しやがった……………勿論だかちゃんと谷おりにしたぞ（雅樹を）

「うん？ああ…俺、いつも深夜まで……………たまに朝まで勉強してたから自然と眼が悪くなって…中学の時掛けてるんだよ」

ソウは新約聖書を取って答えた。

「結崎くんって学校では勉強してませんよね…」

「まあ……………簡単だし」

一応ここは全国でも五本に入る名門校だぞ？……………あ！結城が爪を
噛んで睨んでる

「羨ましいな…顔も良くて成績まで完璧なんて…」

ソウはなんだか飽きた顔してたけど…どうたんだろう？

俺達はなんとかレポートを完成させた…

「結崎くんって本当に頭がいいですね……………おかげで早く終わりましたね」

「……………ああ…」

まさかソウがキリスト教に詳しいなんて知らなかった……………昔は宗教には興味なんてなかったのに

「オース…お前ら順調か…」

「ゲッ新山…」

「七海？随分な挨拶だな……………」

また嫌なやつとご対面だな…

「二人とも、図書館では静かにしなさい」

「なんだ……………蒼？」

プツ……………新山のやつ…ソウの色気にやられてるし……………って、おい

「……………どうかしましたか？」

「……………ッ」

ソウは額をくっ付けた……………風邪じゃないから…結城と小日向も呆れてるし……………ってかいつまでくっついてる気だ？このエロホスト教師が…

グイッ…

「シュウ？」

俺は後ろからソウを引っ張った……………かなりイラッときたので新山先生を睨み付けた。

「人の弟に手を出してんじゃねよ…」

「弟？名字はちがうぞ？」

「訳ありでちがうの…」

「でもにてないだろ…」

変態教師…もといいい新山先生は俺とソウを交互に見た。

「普通の人はよく間違えますよ？」

「なんか………雰囲気が違う…」

「あ、わかります…七海くんは格好いいけど…結崎くんは格好いいというより綺麗って感じですし…」

ソウ無自覚なんだよな…自分がどんなに綺麗か………眼鏡を掛けて色気を醸し出してるせいで周りの野郎共が厭らしい眼で見てるし…俺はそいつ等を睨み付けた…龍真にため息をつかれたが無視だ

「ますます、わからない…顔は一緒だろ？」

「ですけど…髪型とか色とか…服装も…七海くんは着崩してますが…結崎くんはキッチリ着けてますし」

「なるほど…てかソウ？なんで髪を染めたんだ…」

「別に…理由は無いよ」

「ふん？」

我慢比べなら負けないが……

「……………」

「……………」

「……………」笑うなよ……」

「笑わないから……」

ソウって自分のことを話すの嫌ってるよな？

「……………」白髪染め……」

「「「は？」」」」

「うううう…だから、若白髪なんだよ」

白髪って…

「それって……………病氣と“俺のこと”でのストレスで？」

「大丈夫…：少しだし気分転換になったし…：それより…：シユウはどうして染めたの？」

まだ詳しくは話したくは無いみたいだな……………：雅樹の言う通り長期戦を覚悟したほうがいいな

「本当に大丈夫かよ…」

大丈夫だ…：“あの頃”と違って…：俺は強くなったからさ…：だから、そんな顔するなよな…：ソウ

「まあ…：一種の意思表示かな？」

「意思表示？」

「ある意味…現実逃避かな」

チャイムが鳴る……帰宅の時間か……明日会えると分かっている
まだそばにいたい

「悪い…お前ら…今日は職員会議があるんだ…他の生徒も帰してく
る」

「あ…今日は両親が帰ってくる日だ…ごめんなさい…失礼します」

「今日は外せない用事があるからゴメン…」

「悪い…ソウ…今日はバイトなんだ…」

素っ気なくうなづくソウを若干肩を落とし……帰ることにした……
去り際に一度だけソウを見たが何か決意をした表情になっていた……

相変わらず騒がしいバー……g e m i n iの店内は仕事帰りのサラ
リーマンから大学生たちに溢れてる…

「おい…朱！」

「どうした？ 雅樹」

「緑を見かけなかったか？」

「……………いや」

まさか……

「はぁ……朱…少し探しに行ってくれないか？」

「……………めんどくさいな………全く………」

バーを出て人気のない路地を探した………全く………出逢った時といい手間のかかる奴だったな………緑は

「……………あーなんで三者面談なんてめんどくさいもんがあるんだ？」

「……………全くだな………どっかの誰がさんは月に2、3回は三者面談してるもんな」

「うるさう」

ソウと再会する2年くらい前：雅樹が過労で倒れて1ヶ月くらい経った7月の上旬……雅樹とバーの連中と賑やかにけど……心にはすきま風が吹きながら過ごしていた……

「お前は1日一膳を心掛けて生活したらどうだ？」

「雅樹：過ぎたるは及ばざるが如し……って言葉を知ってるか？」

「知ってるが何か？あ！アイス食べたいから買ってくる！朱は何がいい？」

「何でもいいよ……あと暗いから足元に気を付けろよ……滑るのはギャグだけにしとけよ」

「それこそ余計なお世話じゃ！朱のバカ！」

コンビニに走る雅樹の後ろ姿を見てため息をついた。

「やれやれ……うん？」

人気がない路地から微かに声が聞こえる……

「……………やめろってお願いだから…」

「泣き顔もそそるなあ……………」

「諦めてやられなよ…」

明らかに強姦されかけている……………雅樹の奴に見つかると面倒になるな……………仕方無い……………

「……………おい」

俺は低い声で中年男性を呼んだ…

「……………なんだ？お前は？」

「良いところなんだ邪魔するなよ」

「俺も混ぜてくれよ」

男たちの表情が卑しい表情になった……………犯されかけている奴の顔

に微かにあった希望が失せた……さてと…

「……へえーお前もいい顔してるな…良いぜ混ぜてやるよ」

近寄ったふたりの加齢臭に吐き気を覚えたが……こんなもんだろ？
……とりあえず片方の顔に拳を叩きつけた…

「思った通りのバカで助かったよ…そいつを人質に取られたらたまらないからな……」

「なんだと？」

「今は1日一膳を心掛けているんだ…残念だった普段なら見逃したのに…」

憐れんだ視線を送ると馬鹿正直に飛び掛かってきた…

「ぐえ？」

「バカか？喧嘩馴れしている人に真っ正面から来るか？普通………
1対1になった地点でお前らの負けなんだよ……まあ…そいつを人質に取れば別だけどな……頭と力で負けている以上お前らの勝ち目はない……弱い者虐めの趣味は無いんだ……バカは家にとっと帰れよ」

手加減し過ぎたらしくさつき殴った奴が飛び掛かってきたかモーシ
ョンが隙だらけなために軽くかわしてカウンターを喰らわした……
…あ…鼻血だしたよ………うえ…

「……………覚えてろよ」

あーあー逃げるなら黙って逃げよな……最後まで格好が悪い奴等だ
ったな…俺は上半身がほぼ裸になった少年に向かって

「……………じゃな……早々に忘れてくれることを祈るぜ？」

俺が華麗にかつ颯爽に去ろうとすると何かに制服を掴まれた……

「…………あの助かったよ……あの…俺は…」

「お礼は気持ちだけで十二分です……失礼！」

逃げようとしたが後ろから抱き着かれ身動きが取れない…しかも…
震えていて俺の僅かなモラルが振りほどくことを許してはくれなか
った…

「はあ……………分かったからとりあえず離せよ」

男の……………って言っても平均より少し小さいだけの少年……………もしかしたら俺と同じ年かも…

「俺は……………」

「朱！お前は今、鼻血を出している人はお前が……………」

「ほら……………お前のせいで面倒臭いお節介に見つかっただろ」

「はい？」

物凄い勢いで雅樹がこっちに来た……………しんどい…

「落ち着け……………ただお前の言う通り1日一膳を心掛けただけだ……………」

「どこが？」

「だから落ち着け……………家で話すよ」

「全く……ちゃんと説明しろよ？」

はあ……見つけた以上連れていかない訳にはいかないな……

「おい、お前……とりあえずそれを着ろよ……雅樹が売春の疑いで捕まったからたまらん……いろんな意味で」

上半身がほとんど裸なため心優しい俺は今日の体育で使ったジャージを鞆から取りだしそいつに貸してやった……

「うん………ありがとう」

「は？って君！どうしたんだ？朱」

「俺が知るか！とりあえず、家で訳は聞こう………こんな所に長居は無用だろ」

すっかり真剣な面持ちになった雅樹は俺のジャージをそいつにかけてやると手を引いてバーまで向かった……

雅樹はバーに入るなり何なり簡単な料理を作った：そいつは事情を聞きながらできるの待った……：簡単にまとめると：そいつの家庭は半年前に離婚していて父親は離婚した直後に亡くなったらしい：母親に虐待受けていてその母親が最近亡くなって離婚して父親に引き取られて別々に暮らしていた兄を頼るために兄を探していた所に襲われたと：

「……………ありがとうございます…」

「……………お前…雅樹はドMだから『ふん…不味いお前の料理を喰ってやるよ、ありがたく思え』くらい言うと思ふぞ」

「知り合ってばかりの人に嘘吹き込むなよ……このドS野郎」

「事実だろ？しかし俺の洋服じゃあブカブカだな…」

俺の洋服を家から持ってきたが……

「あの…」

「ああ………そういえばまだ君の名前を聞いてないな聞かせてくれないか？」

雅樹は優しく微笑みながら尋ねた…

「あ！すいません…俺は錦戸 緑……ええと…」

「ああ…俺たちもまだ名乗ってなかったな……俺は椎名 雅樹…」

「雅樹のまはMだ…だから気軽にドM野郎と呼んでやれ………不本意だがとりあえず名乗っておく……俺は七海 朱」

「朱のしはSだから…気軽にドS野郎と呼んでやれ……」

「あの……」

流石に強姦されかけたあとにこんなやり取りを見せられたらたまつたもんじゃないな

「……なんだ？」

「ありがとう…七海さんに椎名さん」

「別に？どうせどっかの馬鹿が勝手に助けただろうから…」

「お前は相変わらず…」

「…いつもこんな感じなんですか？」

「ああ…まあ…どうでも良いことは置いといて…」

まさに予想通りの展開だな…

「？」

「君の兄が見つかるまでの間ここで暮らそうか？」

「でも……」

「気にするな…実際に俺も似たようなもんだし…」

雅樹は何故か深くうなずいた…

「その月に2、3回は問題を起こす奴より大歓迎だ…」

「あとで覚えてろよ…まあ…一応よろしく緑」

こうして緑の兄が見つかるまでの半年間……俺と雅樹と緑の三人暮らしが始まった。

【12】

「はぁ………やっぱりか…」

中年のオッサンが三人に緑……あー仕方ない…

「何してるのかな？」

「邪魔すんな」

「ガキは家に帰りな」

はぁ………やれやれ…俺の周りの連中はどうしてこんなやつらばかりに絡まれるんだ？緑といい…ソウといい…全く

「ちょっとよく見ろよ……結構いい顔してるぜ……喘がしたい……」

ねっとりとした視線を送られ吐き気を覚える………前の二人がマシに見える…黒い袋を持った人が俺に近づき肩に手を回した………

「黒い袋に入っているのってなに？」

「ああ…これから君をあん言わすのだよ」

黒く光ったアレに情事に使うあれな薬品……聞かなくてもろくでもないのは理解できたが……

「……………手加減は要らないな」

とりあえず俺に肩を乗せた奴の顔を殴り飛ばした……そのまま残りの二人を蹴って急所を突いた……雅樹の余計な計らいで貴志さんに護身術を叩き込まれたからな……なにが男同士のスキンシップはスポーツだよ……ってあの頃はしんどかったが中学校で喧嘩とか今みたいな時は便利だな……備えあれば何とかやらだな…

「さて……………こないたいけな少年たちにこんな醜惡な玩具を使おうなんて…」

「いたいけな少年たちを……………って朱のどこが弱いだよ」

「……………緑…帰っていいか？」

ゴメンナサイ……と謝る緑……相変わらず減らず口だな……とりあ
えず顔を殴って逃がしてやった……あ！ちゃんと黒い袋を持った
まま逃げようとしやがったので追っかけて奪った……

「はあ……もう緑は家に帰れよ……駅まで送るから……」

「でも……」

「手遅れになったら責任を取れない……俺と緋人さんが揃って居る
ときにしろよな？あまりに兄貴に心配をかけるな……同じ兄として
お前になにかあったら緑の兄さんに会わせる顔がない……」

「……うん……ありがとう」

俺たちは駅に向かって歩きだした……緑はチャレンジ精神が旺盛な
ために何かと厄介ごと起こす……それにいつも俺が巻き込まれる
……ああ……もちろん雅樹も手伝って逃げようとする俺を無理矢理
巻き込んだり、さらにややこしくしたりと……はあ……

「じゃな朱……また明日」

「ああ…また明日」

駅で緑と別れて雅樹のバーに戻った……

「……おい戻っ……」

今日は厄日か？

「七海……ばんわ」

黒い髪に高い身長に平凡な顔

「…ばんわ………じゃねえ…結城なんで居るんだよ」

「私が誘ったのよ…」

「結菜さん！？なんで？」

「「それは腐仲間だから」」

………結菜さん………シツクで綺麗な大人と思っていたの

に……………って陽平さんがぐったりしているし…

「……………何してたんだよ」

「聖地巡りしただけなのに陽平たら疲れたって……………だから雅樹のバ
ーに来たんだよ」

陽平さん……………お疲れ様です…俺は一度ロッカーに行って黒い袋を
置いて戻った……………

「しかし……………結菜さんが貴腐人だったとは……………」

「うふふ……………おばさんになると秘密が増えるのよ」

「おばさんって歳ではないでしょ？大体二十代後半か三十代前後で
しょ？」

「精神が幼いからな」

「陽平？ 私が子供みたいな言い方ね？」

「子供だろ？」

「違いますよ…陽平さん！腐の道を極める人の年齢はいつでも十代なんです」

「……………な訳ないだろ！！」

「その通りだわ…和哉くん」

「……………で朱……………緑は？」

「さすがに危ないから家に帰した……………ちゃんと駅まで送ったから大丈夫だろ」

「今日も襲われかけたか…でその人たちは？」

「二度としっかりお仕置きしました」

「怪我させてないだろうな？」

「少しだけだ……まあ……やってることがあれなだけに仕方ないだろう？」

「はあ……まあいい」

呆れたようなため息をつきカクテルを作り始めた……

「へえ〜つまり七海って喧嘩とか強そうだな……ガードレールを引き抜いたりベンチ投げたり自動販売機を持ち上げたり……」

いやいや……できないから

「違うわ、和哉くん……朱はへたれ攻めよ」

「違いますよ……蒼が強気受けたから七海は鬼畜攻めだよ……何気に嫉妬深いから」
ツンデレ

……話についていけない………雅樹と陽平さんはなぜ青ざめている………

「この目で男前鬼畜攻め兄×美少年強気受け弟が見れる日が来るのを楽しみだな…」

「朱は鬼畜攻めだったとは……」

「俺は鬼畜じゃない……」

「鬼畜でSだろ？」

「黙れ……谷折りと山折り……どっちがいい？」

俺のドスの効いた声に雅樹はカクテルを振りながら脚がガタガタになっている……

「で……和哉くん!! 朱!! 飲み比べしよう!!」

「俺はお酒に弱いから遠慮します……そういえば蒼が化け物みたいにお酒が強いから……飲み比べをやる時はこのバーのお酒を全て飲み干される覚悟が必要だぜ？」

嘘だろ？ ひ弱なソウがお酒に強いとは思えない

「嘘だろ？和哉君？」

雅樹も驚いてるし……

「海斗さんに聞いてご覧なさい？」

喋り方が変だぞ……結城

「意外ね……弱そうなのに」

「俺もびつくりしたよ………乱れて狼たちとにやんにやんする蒼を見たかったのに……」

こいつの頭を砕いちゃ駄目か？

「朱……暴力はいけないよ」

「お医者様が二人もいるなら大丈夫でしょ？」

ニッコリと貼り付けた笑顔でしれっと言うと雅樹と陽平さんはさらに顔色が悪くなった………

「ちょっと…和哉くん？朱を怒らすとトラックを投げ飛ばすよ？」

「結菜……………漫画の読みすぎ…」

本気で疲れているな……………陽平さん…

「そろそろ帰る時間じゃないか？朱と和哉君は明日も学校だろ？」

そんな時間か？

「そろそろおいとましますか……………行くわよ陽平…」

結菜さんと結城の意外な一面が垣間見えた変な1日だった……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4543p/>

deep・red

2011年5月18日07時54分発行